

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03064

研究課題名(和文) 恥の比較民族論 - 南アジア周辺領域における排他的共同性と社会的絆 -

研究課題名(英文) Comparative Study of Shame - Exclusive Communitarity and Social Bonds in the Marginal Groups of South Asia -

研究代表者

橘 健一 (Kenichi, Tachibana)

立命館大学・政策科学部・非常勤講師

研究者番号：30401425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、南アジア周辺領域で、「恥」は親族を中心とした互酬的の枠組みと大きく関わっていたが、国民国家的な体制が構築されていくなか、標準語の読み書き能力、演説能力の不足が恥と結びつけられるようになったことを確認した。また、開発や出稼ぎ経済が広がるなか、「恥」は消費とも結びつけられるようになったことも示した。さらに、ネパールにおいて恥の象徴とされてきた「土地なし農民」という存在が、国家による支援対象として認定されるようになり、新たな「社会的絆」の場を創造していることも明らかになった。そして、そうした社会的弱者への再分配に伴う恥が、同時代的に広がっていることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：This study clarified that the sense of "shame" had been related to the reciprocal relationship among kinship relations in the marginal groups of South Asia. This study also traced, in the process of nation-state building, the inabilities to read, to write and to deliberate a good speech in the national formal language became to have more impact on the sense of shame. As the development and migration economy expanded, the sense of "shame" became to be more related with "consumption". This study also proofed that being "landless farmers", which was considered as a typical type of existence of "shame" in Nepal, became a kind of condition to be supported by the governmental project and brought the emergence of new space of social bonds. This study confirmed that such sense of shame associated with the redistribution to the socially vulnerable has expanded in the contemporary world.

研究分野：文化人類学

キーワード：恥 南アジア 排他的共同性 社会的絆

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、1990年代の調査でネパール先住民チェパンの人々が、他の民族と自らを比較する中、自らを「恥の民族」と呼ぶ状況を見出した。また、「恥の文化」といえばルース・ベネディクトによる日本の「恥の文化」論とそれに対する批判が知られる。本研究は、そうしたネパール先住民の研究と日本文化論の狭間で着想された。

(2) 近年、「恥」に関わる優れた論考が生まれている。アウシュヴィッツの「生き残りの恥」に注目したイタリアの批評家アガンベンは、恥を存在論的に論じつつ、恥が証言と関わる様相を示した。日本哲学者鶴飼は、デリダやドゥルーズの恥に関する議論、ティスロンが示した精神分析における恥の扱いの困難など、哲学的な恥の扱いをレビューし、従軍慰安婦問題も取り上げつつ、恥の比較文化論を呼びかけている。本研究は、近年文化人類学で展開している存在論的議論の成果を踏まえ、また研究分担者のネパール羊飼、チベット難民といった南アジア周辺領域に位置づけられる人びとに関する調査研究を加えて、そうした呼びかけに応えようとするものである。

2. 研究の目的

本研究では、チェパンのように自らを「恥の民族」と呼ぶ先住民、あるいは「恥」と集団性や共同性を結びつけるネパール諸民族、チベット難民といった南アジアの諸集団を対象に、「恥」や戸惑いといった情動の表出、「恥」にまつわる言説および実践についてのフィールドワークを実施、調査研究をおこなう。

そして(1)「恥」の外部に逃れることで排他的に構成される集団性や共同性、逆に「恥」の内部に留まることで排他性を越えて開かれる社会的絆の時代的、地域的なあり方を明らかにし(2)時代、地域を超えた一般性を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

研究代表者、研究分担者間で、恥に関連する文献データベースの共有化を図り、理論的な課題を明確にする。代表者と分担者は、それぞれネパール先住民チェパン、グルン、チベット難民を中心に、恥に関わる現地調査を展開し、恥の文脈毎に異なる様相を明らかにする。その際、動物・人間関係、生業間関係、民族間関係、親族関係、国家との関係や「生き残り」の恥に注目する。

4. 研究成果

(1) 「恥の民族」と「恥の文化」

チェパン社会のなかでは、もともと日常的な食物の交換の際に「遠慮」や「気遣い」を見せる存在に対して「恥を知る」、見せない存在に対して「恥知らず」などとされてきた。

そうした傾向は、姻戚間で顕著で、それらの恥言説は、姻戚間の平等と結びついていた。本研究の調査で、平等な関係を維持できない存在は排除され、そうした存在の貧困状態が社会的絆の場となりうる事が確認できた。また、学校や選挙制度が導入されるのにしたが、ネパール語の読み書き、演説の能力が学校や政党政治の空間でより重要な意味を持つようになり、ネパール語の運用能力が劣る恥も語られるようになっていたこと、さらに、ネパール全体で開発が進められるなか、開発の流れに乗り遅れ、貧困状態に留まる恥も、盛んに語られるようになったことも確認した。

他方、パルパテヒンドゥー社会では、宗教的な規範や職業、学歴などと結びつけられた「名誉」を失うことに「恥」が結びつけられていることも明らかになった。カースト的な禁忌のなかで、食物などのやり取りが限定的であることも確認できた。

こうした恥の布置の問題を、『菊と刀』と比較しつつ検討するなか、遠慮や気遣いは、平等な互酬関係が前提になっていること、能力の不足や名誉の喪失と結びついた恥は、再分配と関わる事が確認された。また、前者では姻戚-親族関係という全体、後者ではカーストや国家、国際社会などの全体が関わっていることがわかった。

さらに議論を進めるなか、南アジア先住民のなかで語られる「恥の民族論」は、この二つの全体性が「遠慮、気遣いするが、言語能力に欠ける」というかたちで絡み合うことで構成されており、日本における「恥の文化」受容も、同様な構成から成り立っていることが明らかになった。

(2) 海外出稼ぎと恥

2000年代以降、ネパールではアラブ諸国やマレーシアなどへの海外出稼ぎが盛んになり、それに関わる恥が確認されるようになった。

家屋や生活水準に関する恥や戸惑いが、海外出稼ぎによる中間層の拡大に伴い、農村部でもさらに広がった。そのなかで、年齢制限などにより出稼ぎに行けない恥、出稼ぎに行ったが蓄えができなかった恥、何も買えなかった恥、が語られるようになった。

生活の格差は、従来からカトマンズ盆地と山地の農村、グルカ兵(傭兵)と農民などのあいだで大きかったが、盆地への移住、傭兵としての採用は容易ではなく、ほとんどの民衆にとって手に届かない「高値の花」であった。近年の海外出稼ぎにより、多くの農民が「中間層」になることで、消費財の所有能力が「恥」と結びついてきたことがわかった。

(3) 結婚に関連する恥

年齢制限以外に、チェパン社会では新婚の男女が出稼ぎに行かない傾向が確認できた。他方、都市的な生活が標準になっているグル

ン社会では、そうした傾向は確認できなかった。グリーン社会では、出稼ぎ者の不倫や離婚といった事例もあり、出稼ぎが結婚生活に問題を生じさせ、それが恥と結びついていることも確認できた。

また、スマートフォンなどのデジタルデバイスが普及するなか、そうした機器を購入できるか、使いこなせるか、という点でも恥の問題が浮上するようになった。それにより、スマートフォンでの通話、SNS機能を用いた新たな出会いが可能になった。チェパン社会では、タマン、ライなどの他のチベット・ビルマ語系先住民との結婚が散見されるようになり、そうした結婚をする若者は、従来通りの近隣のチェパンとの結婚を恥として語ることも確認した。

社会的流動性が高まるなか、従来の結婚スタイルを貫くのか、新たなスタイルを求めるのか、という対立が起き、それらが恥に関わっていることがわかった。

(4)ネパール中部地震と恥

本研究開始直後の2015年4月にネパール中部地震がおき、ネパール社会が大きな混乱に陥ったため、震災や復興に関連する恥の問題を追及した。そのなかでまず見えてきたのは、災害支援しない恥である。これはカトマンズなどで被災を免れた都市住民のボランティア活動、NG活動のなかで語られた。それが民族的な枠組みと結びつけられ、支援に熱心な自民族とそうではない他民族という語りも確認された。また、支援される村落の被災者のなかでは、支援物資をもらい損ねる恥、必要ないのに支援物資を受け取る恥、支援よりも私腹を肥やす恥知らずな政治家たち、という言葉説が確認された。さらに、復興が進められるなか、自らが目指す家屋のあり方や生活水準を取り戻すことができないときに、恥や戸惑いが語られることも明らかになった。

(5)恥の諸問題の時代的な特徴

南アジア周辺領域で、日常的に取り上げられていた恥のひとつは、親族を中心とした贈与や互酬的の枠組みと大きく関わっていたが、国民国家的な体制が構築されていくなか、ネパール語の読み書き能力、演説能力などの標準から外れることが恥と結びつけられるようになった。その時代は、開発が進められた時代であり、その流れに乗れず、生活水準を上げられないことも、恥と結びつけられるようになった。そうした状況が、2000年代に加速し、テレビ、スマートフォンを中心とした大衆消費財を中心とした標準が広がり、「消費」と恥が結びつくようになったこともわかった。

同時に、村落の親族関係に縛られた結婚の恥など、個の自由に関わる恥の問題も前面化している。

また、災害支援などに見られるような弱者、

あるいはマイノリティを支援しない恥、それに乗じた不正をおこなう恥などが浮上している。

ネパール先住民や被災者などの社会的弱者、チベット難民の問題を追っていくと、そうした周辺領域に対する再分配とそれにまつわる恥と葛藤が、様々な場で見受けられることがわかった。地域を超えた、同時代的な恥がここに見受けられるのである。

(6)「土地なし農民」が生む社会的絆

本研究を進めるなかで、多様な社会的な地位の上昇をめぐる恥の問題が浮上したが、社会的絆の空間も見いだすことができた。ネパールでは、土地なし農民をスクンバシといい、スクンバシになることは「恥」として語られる。本研究では、それがもともとシッキムから帰還した土地なしのネパール人のことを指していたことを見いだした。さらに、スクンバシであることが、村落社会で保護の対象となる資格になり、また政府やNGOなどの支援を得るための資格になっていることも明らかにした。今日、ネパールで社会的地位が下降することで広がる社会的絆の場所は、スクンバシと結びつけられており、その絆の基礎が農業生産の能力欠如と互酬的社会関係からの脱落から成り立つことが確認された。

(7)今後の課題

恥の問題が、贈与や再分配の問題と大きく結びつくことが明確になったが、本研究では、それらの問題の根本にある所有の問題に踏み込むことができなかった。今後は、ジェンダーや家族・親族、村落や行政組織と関わる所有の問題を恥や存在論と結びつけつつ、緻密に追求していくことが求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

YAMAMOTO, Tatsuya. Lyrics Matter: Reconsidering Agency in the Discourses and Practices of Tibetan Pop Music among Tibetan Refugees, *Revue d'Etudes Tibétaines*, 40 126-152, 2017. 査読有

山本達也「近代経験のアリーナとしての歌手の身体-チベタン・ポップ制作に見る「屈折する近代」と嗜好品の動態性」『嗜好品文化研究』第2号、40-48頁、2017年、査読有

渡辺和之「ネパールの牧畜:出稼ぎと道路と羊飼いの」『ピオストーリー』26、62-63頁、2016年、査読有

山本達也「かたちを変えていく歌詞-チベット難民社会におけるチベタン・ポップの作

詞実践を事例に」『国立民族学博物館研究報告』40(2)、311-347頁、2015年、査読有

〔学会発表〕(計 44 件)

WATANABE, Kazuyuki. Damages of Nepal Earthquake for the villages along Trekking Route: Cases of Gosainkund and Helambu. International Conference on Mountain Development in a Context of Global Change with Special Focus on the Himalayas 2018. Himalaya Hotel Kathmandu, Apr.22, 2018.

橘健一「ネパール先住民の暮らしと文化保護」宇治国際交流クラブ 2017 年度総会、宇治市公民館、2018年3月18日

WATANABE, Kazuyuki. Inside and Outside of Evacuation Area: Problems of dairy farmers in Fukushima Prefecture, Japan. East Asia History Association 2017, Jinnan Campus of Nankai University, Tenjin, Oct.28, 2017.

渡辺和之「ヒマラヤにおける農牧林産物交易：特に祭礼に伴う家畜の流通に注目して」人間文化研究機構現代南アジア地域研究 HINDAS 第4回研究集会、広島大学、2017年10月21日

橘健一「ネパール先住民チェパンの経済空間の歴史」2017年度ヒト・自然・地域ネットワークの再構築：ナラティブとアクションリサーチをつなぐ数理地理モデリング研究会、総合地球環境学研究所、2017年8月9日

渡辺和之「バングラデシュの犠牲祭と家畜交易」2017年度ヒト・自然・地域ネットワークの再構築：ナラティブとアクションリサーチをつなぐ数理地理モデリング研究会、総合地球環境学研究所、2017年8月8日

渡辺和之「コメント・山地で移動することの意義：シンポジウム The Himalayas on the moves」南アジア研究集会、愛知県知多市柏木旅館、2017年7月29日

渡辺和之「ネパール地震の被害状況と家畜交易」アジアの巨大山塊の比較研究会、北海道大学、2017年7月26日

YAMAMOTO, Tatsuya. Conjunct Citizenship: Tibetan Refugees Encountering Multiple Actors, 10th International Conventions of Asian Scholars, the Chiang Man International Exhibition and Convention Centre, Jul.20, 2017.

渡辺和之「ヒマラヤの家畜回廊の研究：バ

ングラデシュの犠牲祭と ネパールのダサイン」熱帯家畜文化研究会、国立民族学博物館、2017年7月9日

橘健一「チェパン社会における借金・出稼ぎ経済と震災復興」2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究第2回研究会、2017年7月1日

渡辺和之「バングラデシュの犠牲祭に見る家畜市場」生き物文化誌学会、国立民族学博物館、2017年6月24日

渡辺和之「ネパール地震に伴うトレッキングルートの被災状況：ゴサインクンドとヘランブーの状況」日本地理学会、筑波大学、2017年3月28日

渡辺和之「ネパール地震の被災状況と居住地選択」2016年度ヒト・自然・地域ネットワークの再構築：ナラティブとアクションリサーチをつなぐ数理地理モデリング研究会、総合地球環境学研究所、2017年2月12日

橘健一「ネパール中部地震からの先住民チェパンの復興空間」2016年度ヒト・自然・地域ネットワークの再構築：ナラティブとアクションリサーチをつなぐ数理地理モデリング研究会、総合地球環境学研究所、2017年2月12日

TACHIBANA, Kenichi. From Yams to Corns-The Ecological History of The Chepang in Nepal. International Workshop on Living Spaces under Changing Climate and Environment, North Eastern Hill University, Meghalaya, India, Nov.7, 2016.

WATANABE, Kazuyuki. Kurban Ido Festival and Livestock Market in Case of Bangladesh. International Workshop on Living Spaces under Changing Climate and Environment. North Eastern Hill University, Meghalaya, India, Nov.7, 2016.

WATANABE, Kazuyuki. Over Sea Migration and Village based Animal Husbandry: Changing Agro-Pastoralism of East Nepal, Mountain Response to Global Change IGC 2016, Mountain Communities in High Asia, Aug.23 2016.

渡辺和之「原子力発電所事故による畜産被害」国立環境研究所福島支部・災害環境研究特別セミナー、福島県環境創造センター、2016年8月8日

橘健一「ネパール中部地震の被災・復興状

況：チトワンの事例から」人間文化研究機構現代南アジア地域研究 HINDAS 第 2 回研究集会、広島大学文学研究科、2016 年 7 月 30 日

②① YAMAMOTO, Tatsuya. Pitfalls in Appropriating Human Rights Discourses?: A Case Study of Tibetan Refugees in India (and Nepal), The 3rd ISA Forum of Sociology, University of Vienna, Jul.13,2016.

②② 渡辺和之「見えづらくなる震災被害:ネパール地震被害報告」生き物文化誌学会第 14 回学術大会東京大会、星薬科大学、2016 年 6 月 26 日

②③ 渡辺和之「ネパール地震報告：支援物資を公平に分配する難しさ」生き物文化誌学会第 14 回学術大会東京大会、星薬科大学、2016 年 6 月 26 日

②④ 橘健一「ネパール地震報告：先住民チェパン山村の被害・復興と森林」生き物文化誌学会第 14 回学術大会東京大会、星薬科大学、2016 年 6 月 25 日、26 日

②⑤ 橘健一「ネパール中部地震後のカトマンズ盆地の被害状況と避難生活」2015 年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究第 1 回研究会、国立民族学博物館、2016 年 6 月 4 日

②⑥ WATANABE, Kazuyuki. The sheep development committee: How Nepalese sheep herders get the products of development program?, IUAES inter-congress 2016, Hotel the palace at Dubrovnik, Croatia. May 5, 2016.

②⑦ 渡辺和之「山岳地域における資源利用と観光化：ヒマラヤ・ヨーロッパ・日本」ネイチャー・アンド・ソサイエティー研究グループ主催シンポジウム：オーガナイザー：渡辺和之、日本地理学会、早稲田大学、2016 年 3 月 22 日

②⑧ 池谷和信・渡辺和之「富士山麓における茅場利用と財産区」ネイチャー・アンド・ソサイエティー研究グループ主催シンポジウム：オーガナイザー：渡辺和之、日本地理学会、早稲田大学、2016 年 3 月 22 日

②⑨ 渡辺和之「除染の終わりが補償の終わり？：福島県における原発事故の畜産被害」日本地理学会、早稲田大学、2016 年 3 月 21 日

③⑩ 渡辺和之「ネパール地震支援活動報告：私的な支援活動の試みとその反省点」日本地理学会、早稲田大学、2016 年 3 月 21-22 日

③⑪ 渡辺和之「ヒマラヤにおける人口移動と居住空間の変容：高度差利用から近くの農牧林産物利用へ」2015 年度ヒト・自然・地域ネットワークの再構築：ナラティブとアクションリサーチをつなぐ数理地理モデリング研究会研究会、総合地球環境学研究所、2016 年 2 月 2 日

③⑫ 橘健一「ネパール先住民チェパンの子どもたち」子どもたちのありのままの姿をとらえるセミナー、京都文教大学・社会福祉法人宇治福祉園共同企画、みんなのき保育園、2016 年 1 月 31 日

③⑬ 橘健一「ネパールにおけるジャナジャータイ・アディバシーの声-チェパンの土地の要求を考える-」2015 年度現代南アジアにおける法と権利の動態をめぐる研究第二回研究会、金沢大学サテライトプラザ、2016 年 1 月 30 日

③⑭ 橘健一「ネパール大震災の被害・復興状況と先住民チェパン」宇治国際交流クラブ主催小さな国際交流・スマイル研修会、宇治公民館、2016 年 1 月 24 日

③⑮ WATANABE, Kazuyuki. Outside of the evacuation area: Suffering of dairy farmers in Fukushima Prefecture, Japan. East Asia Environmental History Association. Kagawa University, Takamatsu, Oct.24, 2015.

③⑯ WATANABE, Kazuyuki. Who evacuate and why remain here? Decisions about nuclear accident among some families of Fukushima Prefecture, Japan. International Congress of Historical Sciences (ICHS), Shandong University, Jinan, China, Aug.27, 2015.

③⑰ YAMAMOTO, Tatsuya. "Selling Healing: A Case study of Tibetan chanting Cd production in Kathmandu." 9th International Convention of Asian Scholars, Adelaide Convention Centre, Australia, Jul.7, 2015.

③⑱ 橘健一「ネパール震災における被害の「周辺」と支援の「周辺」- チャングナラヤンとチトワンの山村の事例を中心に -」日本ネパール協会関西支部主催ネパール大地震の現地報告と復興支援研究会、立命館大学、2015 年 7 月 5 日

③⑲ 渡辺和之「カトマンズ盆地における地震の被害状況」日本ネパール協会関西支部会、立命館大学、2015 年 7 月 5 日

④⑩ 渡辺和之「オカルドウンガ郡における支援活動：その試みと問題点」日本ネパール協会

関西支部会、立命館大学、2015年7月5日

④①渡辺和之「ネパール地震調査報告：特に防水シートと竹細工を利用した緊急支援の提言」生き物文化誌学会、中央大学、2015年6月28日

④②渡辺和之「原発事故と地域の維持：南相馬市と浪江町津島地区の酪農家の事例から」生き物文化誌学会、中央大学、2015年6月28日

④③橘健一「被害甚大地域の周囲では？：カトマンズ盆地とチトワン郡の事例から」ネパール中部地震緊急報告会、名古屋大学、2015年5月25日

④④渡辺和之「カトマンズ盆地の被害状況と避難生活：ネパール地震調査報告」ネパール中部地震緊急報告会、名古屋大学減災センター、2015年5月25日

〔図書〕(計 5 件)

末原達郎・渡辺和之「岩瀬曳山車祭り：地域アイデンティティの再生」阿南透・藤本武(編)『富山の祭り：町・人・季節輝く』桂書房、2018年、252頁(95-114)

山本達也「民族自治と完全独立、そしてその狭間-チベット難民の今」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界-わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年、288頁(118-120)

橘健一「ネパール先住民チェパン社会における「実利的民主化」と新たな分断-包摂型開発、キリスト教入信、商店経営参入の経験-」名和克郎編『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相：言説政治・社会実践・生活世界』三元社、2017年、592頁(199-232)

山本達也「演奏空間という〈場〉-立ち上がるリミナリティとチベット難民社会の日常性」秋津元輝・渡邊拓也編『せめぎ合う親密と公共-中間圏というアリーナ』京都大学学術出版会、2017年、326頁(263-287)

渡辺和之「マオイストの犠牲者問題：東ネパール・オカルドゥンガ郡の事例から」南真木人・石井博(編)『現代ネパールの政治と社会』明石書店、2015年、484頁(91-134)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
橘 健一(TACHIBANA, Kenichi)
立命館大学・政策科学部・非常勤講師
研究者番号：30401425

(2)研究分担者
渡辺 和之(WATANABE, Kazuyuki)
阪南大学・国際観光学部・准教授
研究者番号：40469185

(3)研究分担者(2016年度まで連携研究者)
山本 達也(YAMAMOTO, Tatsuya)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：70598656

(4)研究協力者
()